

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 複数性の哲学——アレント哲学の体系的解釈

氏名 橋爪大輝

本研究は、ハンナ・アレントの思想を、複数の限りの人間的生の構造を問い、解き明かした一箇の哲学として、体系的に解釈することを試みるものである。複数性は人間的生の全域に浸透している。彼女によれば、ひとは人びとのなかの一人として認識し、行為する。政治は人びとを組織する営みであり、世界もまた人びとのあいだに開かれる。思考や意志といった精神の活動性は、人びとのあいだから後退して一人で営まれるものだが、彼女はそれらにさえ複数性の痕跡を見てとっているのである。本研究は、彼女の哲学的二主著『活動的生』(1960年)および『精神の生』(1978年、死後刊行)の内在的検討を通じて、複数性の解明を目指す。

第一章「現象」において、私たちは主に『精神の生』の第一巻・Iを検討し、アレントの現象概念を分析する。彼女によればあらゆる存在者は現象であり、現象である限りで実在的である。現象は見る者(知覚主体)に対して現象し、その存在において他者に依存すること、また複数の主観に対してその視座に応じて別々のアスペクトを呈示することを特徴とする。このような現象であることが、なぜ実在性の標識になるのだろうか。たしかにひとは、自らの知覚する対象について他者に問いあわせることで、その実在性を確認することができるかもしれない。しかし主観と他者が別箇のアスペクトを得るにすぎないとすれば、両者が同一の対象を共有しているかが問題となる。

ここで、現象の間主観的な共通性を確保しうるものとして共通感覚が提示され、実在性をめぐる議論は転回を迎える。すなわち彼女は実在性そのものを定義しなおし、実在性が三重の共通性から「立ち上がる」とするのだ。それは①現象の間主観的な共通性、②その五感にわたる共通性、

③現象のコンテクストの間主観的共通性である。この三重の共通性の獲得を可能にする共通感覚とは、いったいなんだろうか。私たちが示したのは、彼女が共通感覚と呼ぶのは概念と感性的知覚の共働の構造であるということである。ことば（概念）は、五感が与える異種的な所与や、諸主観にとって異質なアスペクトに、共通性を創設する。このとき実在性も新しい規定を受け取り、概念の共通性を拠り所として様々なアスペクトを引きくらべ、論じ合うことによって獲得されるものとなる。最後に、以上の議論に基づいて『活動的生』第二章の公共性論も、第一義的には認識共同性の議論として読み直すことが可能であると示される。こうして、アーレントの認識論における複数性・間主観性の重要性が示された。

第二章「行為」では『活動的生』第五章を検討し、アーレントの行為概念を解明する。本章では「行為一般」としての行為が検討されるが、私たちはまず、彼女の行為論の基礎に存する複数性一般（存在者の特殊性が他性であるとする概念）を検討し、行為における能動と受動が一体化するような出来事として捉えられる局面を分析する。

つぎにより具体的な行為を検討し、行為が、どのような経緯のもと、いかなる意図をもって、なにをしているのかということの、行為者自身による言語的な分節性によって特徴づけられることを確認する。ここでアーレントは行為者を脱中心化し、行為は現象として知覚する他者に供されること、さらには行為者には知りえない行為の〈意味〉が存することを主張する。

行為の〈意味〉をめぐる彼女の考えを明らかにするため、私たちは始まりの概念を検討する。行為は他者のあいだでなされる以上、他者に影響を及ぼさずにはいない。行為は関係を創設し、行為者の意図を越えた帰結を引き起こしうるのである。彼女はこうした側面を捉えて、行為を始まり（アルケイン）とその継承（プラッテイン）とに分節化する。行為は物語においてこそ、一箇の始まりとして規定することが可能であり、物語る者のみがこの行為の〈意味〉を見いだすことができるのだ。

こうして私たちは、複数性によって特色づけられたアーレントの行為概念の内実を明らかにした。

第三章「政治」は、より直接的に複数性の問題に触れるものである。ここでは引き続き『活動的生』第五章を検討し、前章の「行為一般」に対し、以下では「政治的行為」を分析対象に据える。行為は他者に影響を与えることによって、行為の帰結を予測不可能にする。この予測不可能性は、アーレントが見て取る行為の窮状のひとつであり、それを克服しうるのが約束なのである。というのも約束は「行為者 A が行為 a をするとき、行為者 B が行為 b をする」ことをあらかじめ確保して、行為の野放図な連鎖を意識的な連携に転化しうるからである。

約束は、アーレント特有の権力概念をも説明可能にする。権力は公的空間を存在させ、維持するといわれる。私たちが明らかにするとおり、この公的空間は、潜在的な行為の連携としての制度的実在であり、権力とはこの制度的実在を存在せしめる力だといえる。したがって、権力の源泉は、行為連携を作り出す約束の力なのである。

ここで私たちは、約束に至る合意形成プロセス、すなわち説得の問題に突き当たる。『活動的生』が沈黙するこの論点に解明を与えるのは、「真理と政治」論文である。同論文は、政治的なコミュニケーションにおいて流通する「意見」の分析を含んでおり、説得とはこの意見を他者に受け入れてもらうプロセスなのだ。意見は、真偽が問題となる真理とは異なり、「好ましい／好ましくない」という評価（〈趣味〉）を下しうるものである。アーレントによれば、こうした主観的な〈趣味〉を相手に受けいれさせる説得は、一見「こい求める」ことでしかありえないとされるのだが、私たちは説得には「相手の意見の含意を展開する」という契機が潜んでいることを別抉し、これこそが説得の手続きを形づくるということを明らかにした。

こうして私たちは、アーレント政治論の原基的構造を解明した。

第四章「世界」では、『活動的生』の第三・第四章の議論を検討することで、アーレントの世界概念の解明が試みられる。彼女にとっては世界も、複数の人びとの〈あいだ〉に拓かれるものであることが強調されるのだ。世界は三重の契機、すなわち①現象の世界、②関係の世界、③物世界を有している。このうち①・②についてはすでに或る程度解明されているので、本章では③の物世界を中心に検討する。

物世界は文字通り〈もの〉からなるが、アーレントはこの〈もの〉が自然に抗して制作されるという。彼女によれば自然とは分節性を欠いた運動であり、〈もの〉の制作は不断の運動に対立する持続的なものを作り出すことであると考えられる。このような〈もの〉からなる物世界に、彼女は二つの特徴を認めている。

〈もの〉は「持ちこたえる性質」によって、人間的使用の可能性へと開かれ、有用性を獲得する。ここから物世界は第一に、有用性という特徴を得る。〈もの〉は〈…のために〉という関係（有用性）によって他の〈もの〉と結びつき、そうして結びつけられた〈もの〉の総体が世界を形づくるのである。アーレントは、この物世界においてもその原理として権力を見、権力が作りあげる制度的連関のうちに置かれることで〈もの〉は有用性を得ると主張するのだ。

物世界は第二に、持続性という特徴を有する。アーレントは芸術作品を持続的な〈もの〉の範型と見なすが、それは使用されることがなく、持続性を純粋に発揮するからである。こうして彼女は〈もの〉に有用性とは異なる、〈ありつづけ、越えて存続する〉というあり方を見て取るのである。物世界はその持続性において、一方では転変する人間的実存にとって安定的な尺度として機能し、他方では法の拠り所ともなる。

こうして、複数的な人間のあいだに拓かれる世界の諸性質が明らかとされた。

最後に、第五章「精神」では、『精神の生』第一巻に基づいてアーレントの思考と良心の概念を、第二巻に基づいて意志の概念を分析する。彼女によれば精神とは複数性からの後退であるが、それでもなお複数性の痕跡を帯びている。

ひとは精神の活動性において、他者や世界との関係をいったん留保し、自分自身とのみ関係する。この自己関係を、彼女は具体的には〈私と私自身〉の対話であると考えている。彼女は時間

を、自分自身とのあいだでの対話を可能にするものと見なしている。つまり思考とは、時間において可能となった、複数性の二元性への転化なのである。さらにアーレントは、この思考の活動性が同時に良心として働くとも論ずる。自己差異化する思考は、同じ〈私〉の思考であるために統一性を獲得する必要があるが、その統一性は論理の一貫性によって得られる。そして思考する自我は、自らの行為の規則を採用するにさいしても、この種の一貫性を形づくろうとするのである。たとえば〈盗むなかれ〉という規則をどのような状況においても遵守することで、〈私〉は〈私〉であり続けることができる。だからこそ、思考の一貫性は良心として働くことができるのだ。

アーレントは、精神の働きかたの第二の様態として意志というありかたを認める。彼女はまず、意志が或る事柄についての可 - 否を示す能力であるといい、つねに〈私は意志する〉と〈私は否と意志する〉が抗争しているという。しかし、このような可否の能力のみが彼女の意志概念の全容ではない。彼女は、意志よりも恒常的な愛、そして目的を設定し計画する能力を意志の契機として認め、意志の「無差別性」という難点を克服しようとしている。これらの側面を捉えてはじめて、意志概念は十全に把握することができるのである。

私たちはこうして、最後に複数性から後退することとしての、〈私〉の確立である、精神の概念を解明した。

以上の五章を通じて、〈複数的な人間的生〉の諸契機が総覧され、アーレントの〈複数性の哲学〉の全貌が示された。